

情報基盤センター

I	研究水準	研究 29-2
II	質の向上度	研究 29-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

期待される水準にある

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、平成 19 年度の教員一名当たりの論文発表件数が 10 件を超え、そのうちの約 4 割が和文以外の論文であり、3 分の 1 以上がこの分野で高い評価の国際会議論文となっている。研究資金の獲得状況については、科学研究費補助金等の競争的資金が毎年 20 件程度採択されている。また、大型の受託研究も行われており、平成 19 年度では、競争的資金の総額は 2 億円強となっているなどの相応な成果があることから、期待される水準にあると判断される。

「共同利用・共同研究の実施状況」のうち、共同利用サービスの高度化等に関しては、テキスト処理プログラム等の多くのソフトウェアを世界に公開しており、ダウンロード数も月間 200 を超えているものもある。スーパーコンピュータは、200 以上の機関によって共同利用されており、理論最大性能に近い形で運用がなされている。また、京都大学、筑波大学との間でオープンスパコンの仕様をまとめ、次世代スーパーコンピュータの研究開発、利用方式に新しい方式を導入したことなどは優れた成果であることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、情報基盤センターの目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、情報基盤センターが想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

2. 研究成果の状況

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、多言語用例検索システム、高効率データ転送等、多数の優れた研究成果があり、また、過去 4 年間に猿橋賞、日本気象学会賞等 40 件の受賞があることも特筆すべきことである。社会、経済、文化面では、共同利用センターとして、図書館ナビゲーションシステム、学習管理システム、データ転送効率の大幅向上方式、スパコンの自動チューニング技術等、サービス業務と関連した様々な優れたソフトウェアを開発し、また、フロンティアシミュレーションソフトウェアプロジェクト（FSIS）

等と共同で大規模シミュレーションソフトウェアを開発し、社会に貢献していることなどは、優れた成果である。

以上の点について、情報基盤センターの目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、情報基盤センターが想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

II 質の向上度

1. 質の向上度

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

当該組織から示された事例は3件であり、そのすべてが、「大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している」と判断された。